



双葉の園 園だより



「ベアテさん・金森徳次郎、一人一人の権利の尊重」

毎年5月になると、なんで子どもの日の頃には、雨が降るんだらうと思いますが、その雨に洗われて一雨ごとに若葉が美しくなってきます。気持ちはウキウキとして外に行きたくなる季節ですが、今年は少し辛抱しましょう。

・さて5月3日は憲法記念日です。

この日の新聞には、ベアテ・シロタさんのことが載っていました。ベアテさんは、ウィーン生まれで、父親はレオ・シロタという当時有名なユダヤ系のピアニストでした。レオ・シロタは、演奏旅行で訪れたことのある日本から招かれて半年の予定で来日します。芸大の生徒からの懇願もありましたが、ユダヤ系という事からドイツに占領されたウィーンに帰る時期を失って、その後17年間日本に住んでいます。ベアテさんは、日本で子ども時代を過ごし、戦争中はアメリカの大学で学び、ジャーナリストを目指しました。しかし卒業後の1946年に、日本で連絡の途絶えた両親を心配して焼け野原の東京に探しに来たわけです。ちょうど進駐軍は日本語の良くできる人材を探していましたから渡りに船でした。語学の才能は大変に豊かで、東京大学の図書館の中からワイマール憲法（ドイツ語）、フランス共和国憲法（フランス語）、ローマ法（ラテン語）を探し出しました。それらの原文を読み解くことが出来たのはベアテさんだけで、ワイマール憲法から多くを学んだそうです。マッカーサーの選んだGHQ憲法草案制定会議の将官たちは、平時には法律家だった人や実業家もいて素晴らしい人材がそろっていたようです。この人たちが自分の国でもできないような理想を込めて憲法を作り上げました。

ベアテさんは、GHQ憲法草案制定会議のメンバーとして抜擢されて日本国憲法の人権条項・第24条（家族生活における個人の尊厳と両性の平等）草案を執筆しました。

戦前の日本の女性の立場を知るシロタさんはもっと細かく色々な草案を作りましたが、上官から、「憲法は国の大元だ。細かい条項はその時々法律を作ればよろしいと言われて全て削った。結果的にそれが良かった。そして22歳の女性が憲法の草案を書いたなどと知られたら当時の日本では絶対に受け入れられなかったので、今まで言えなかった。」と戦後60年してから証言しています。

・日本では金森徳次郎（双葉の園前理事長夫妻の仲人）が第一次吉田内閣の憲法担当大臣でした。金森は、戦前の反省から、十分に説明しないと誤解を招くという信念から懇切丁寧な説明を行い、100日以上かけて両院で議論を重ねた末に日本国憲法を成立させています。その理想の高さには、後年、吉田茂が「徹底した非武装では外交が難しい。金森にしてやられた。」と愚痴を言っています。

金森徳次郎のことは、本田早苗前理事長は大変尊敬していたので、金森が引退して田舎に帰るまで何度も金森家を訪問して話を聞いていたそうです。

私たちの保育の根本は、一人一人の個性と権利の尊重です。

シロタさんの作った憲法第24条「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」は私たちにとっては、とても大切なものです。

今も個人の尊厳と両性の平等は大きな問題です。

